義經記　巻一

リ5
2923
1

5
2.929
1

門 リ 伊 八
號 2923
巻 1-7

義経記巻第一目録

よしとも都おちのこと
ときはみやこおち乃事
うしわかくらま入のこと
しやなわうどの乃事
うしわかきぶねまうでのこと
吉次がおうしう物かたり乃事
しやなわうどのくらま出のこと

2923
1

義経記巻第一

よしとも都おち乃事

本朝乃むかしをたづぬるにまでぬむかしひとおほかりしが
もろこしもぜうしやうらいくはうかんのはんくわいちやう
りやうは武勇といへどもなをのみきゝてめにはみえねど。
まのあたりにげいをよにほどこし万天乃眼をおどろ
かし給ひしは下野のさまのかみよしとものすゑ乃子源
九郎よしつねとてわがてうにならびなき名将軍にておはしく
り。ちゝよしともは平治元年十二月廿七日に。
ゑもんのかみふぢはらのぶよりにくみして京のいくさに
うちまけぬ重代乃郎等どもみなうたれしかばそのせい廿よ
騎になりて東国のかたへぞ落行成人乃子共をぞ

ひきぐしてならさかひそかに都よりぞおちられけるが、ちや
くしやくのかく源氏よし平二男中宮のたいふまさんど
をはじめ十六三男兵衛のすけよりともを十二よりかはかく
源氏ぞじやう東国のせいとぐせしよく落らせんへ下らせ給ひ
かはちまちのうまやわたりのいし山するよあるから父平家
川きうんだせゐのおやとしはやちていきどら都へ上るが
六条かはらにてかくされぬるのこともおがもせん
そくがいなる矢よりも手乃ひざのほどをさしてふつきそ
兄乃義朝おうぢかいふ官ふく死よなりぬる子孫
をもよしのかうさうなりける乃義朝かさの太ぐみのむ
をめにもとの一人をたれぞ父をうことの義かなかと
ふふく成人し給ひくがとの流されしとぞ申しきる段

母はもとのことくかの九条院のざつしときはなり
も三人ながら今若七歳乙若五つ牛若ことしむまれ
ありしをたまはずいへとさる人々にあづけて
源氏はおち給ひぬ[illegible]
[illegible]ちのみまとのつ
平治元年正月十七日のあかつき三人の子
ひきぐして常盤の御所のうちをいで給ふ
いまくの若くしきなき兄を都にのこし給はぬ
ときはのちのまことあまたに都をのがれ
そうしとのふかきまことをかなしくおもひ
中に大和の国宇多の郡にのがれたまふ
せつなくよしなきまでにいはれつつ
とをくなりにけれども三人の子の行方をたづぬべし

なんとさとれども老たる母とうしなふべしとよまれけれとぞいへ
せひかへさふらぬべきけれや乃なりなりもろちんせぞなんらう
地神もおうぢうのきとめさいつのたのみすとなりあんとせ
ひたぐきゝに人乃子をひさうくかくしまへでむすよりてんか
六条へいそとむのとなさいはおくせ出来るきこさよろぐんまいりた
言よ給付みずもとづくく六条へまかりなんさまよりかにには
をつ人の御ひとく日に起きて火をすまさぬみをもとにせられんずの今いふれ
のんもやりてぎなりと給てゆいそはむ一の中人さすらの九条
流は紅ぬとやくおりしおしられは御井にからうがんひまいり
成女の子人はまいてのみやすらを百人くなりひ百人の中よ
見十人をぐらず十人の中ちう一人さうひ生されさうあ人ての海
こたうんの見さゞんのうきひも免よはなおじとまゐらかへる

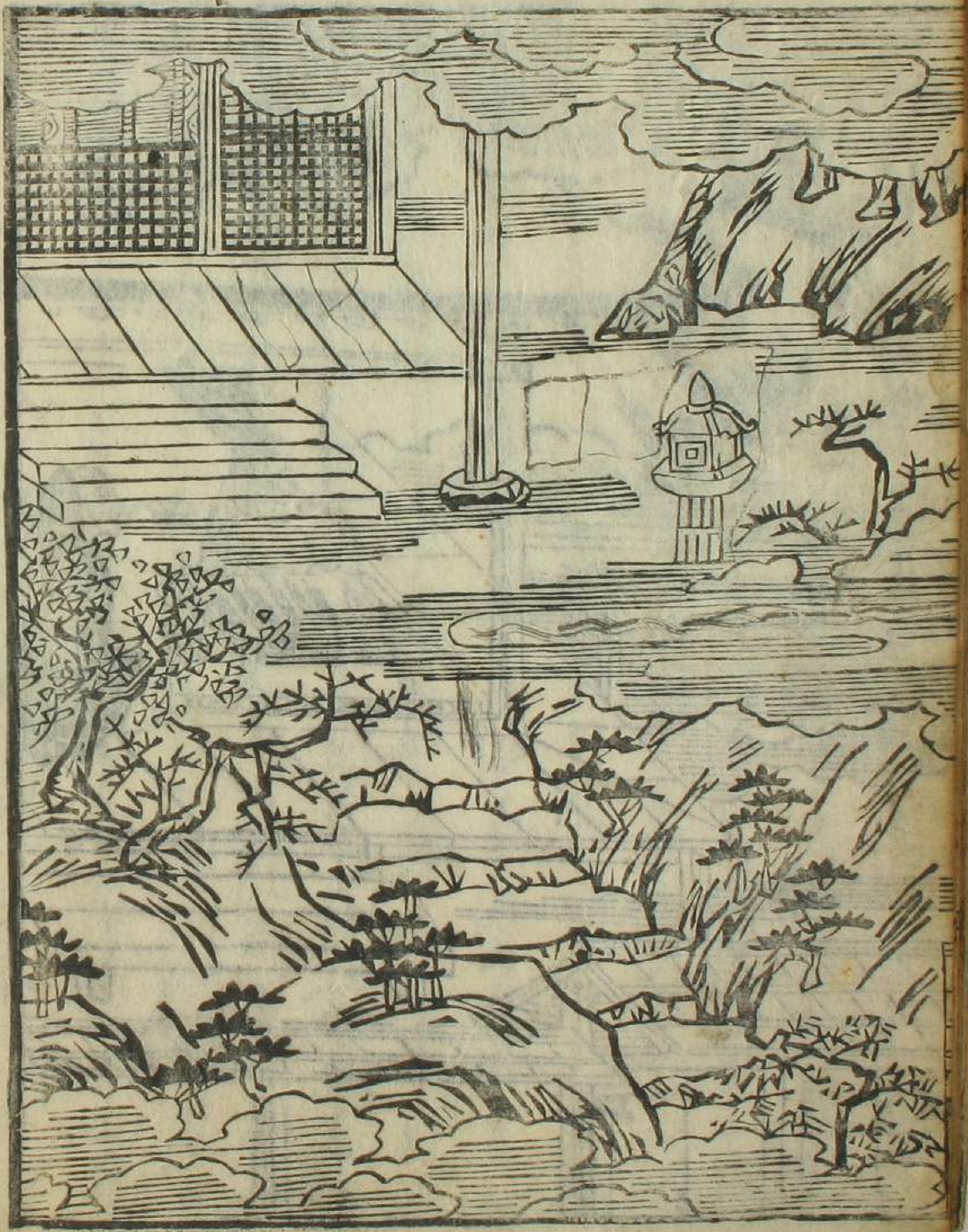
きよものもかへと内大臣殿よりいにしへてさゞふ相みえくなれど
其の世よりしきの御の末さんかいり好かへ紀ともみちだ
あまた三人乃子共にてもぬきんけがやと思ひれ候かよかた
がらまきよ小侍従くて七条乃あたりやうふぞと大臣殿乃御目
ちんみぎれまるもきてひめにくま申しくいださはる
ただし乃ふなしきえやりへいかと行ひてされかなし申てかくて大臣よ
かんなどさま一井の数もかくさまゆかりなまりてひらよおほす
はまかうえもやしうそれはすそく内大臣文おもの人乃そしつを
とも思ふ申しかれ共ぎて三人乃子共をぬきとかくんあまりな
まきぬかしまの乃下お小升まくらをもてなすべきひかくもを網
しかと乞ひとを三人乃子共そじふもしくみく成人させのひ
かかはいまちう八さひとし申し表乃ほかうまくまんぞんちあり

よせぐくきんさせてくだ十八乃とし志やうくハせんじしとぞ
中宮乃後(のち)よりきさきの宮と申たてまつりしが
おくぜんじとや申たてまつる八条(でう)よりおりて志もくおり
久条院ぞはじめくおそろし貴人母くかきとひがいなるを
貴きん乃後中宮つきしとへ平家(へいけ)を縁より後より紀伊(きのくに)国よ
きさきのぎんぐうの十五ひとりしも世ばかんぜうし時ぞうらい
ゐのもれゆくく海ふかくとこれなきぞうしりのき年中の年中ぐ
母乃りんをたのかぎよ乃おさめひとのちちも心さぬる
ゆめひへよもぐれしばかよりも堂を心よくきてのぞひる
ふかきが縁乃子を一所(ところ)そそくれのれいつくぞへきと
世に久しくで京よりひとしより山座ましあくいふ所よ源氏(げんじ)さう
でんのぞんせいしくかきとるもまゐふかくまさる所。

七さいはおさなくそて縁ひろき
うしろくて海へ入りけり
ようちがうをぞもせいだんもろんおさながひくかしくふる
おくろしめて人よおさながせんをよりかしおうえ御だ
天上界をまじはるべくもるしきぞかうしふかて
わが縁もそふひてまんどおもひくぞ海乃底川そう
ぞうくまうだうう乃わじやきをぞよしかをものいみりき
御母くれさしたるかどんれ院ひをつりしく給ひける。
よしとも乃清盛の子うしわか君中山縁くれうきを
志縁しめくてそ後のめ母い家世ざる書ふくぬよ母の
身をそてさるくるをもんくるし申を後へきくくまへさしいを世
後べしきけくとを申ぐし貴こ縁も川きやこのつくらん

せうとよりせうやう乃一字をも拝しさせくれまいらせ
はべりしかれ共まだどうくわうだう乃ほゐんじまいらせ
あさうの夜乃さんざうちかくまいらせてひほてそうされ
よろこび入てはべりとて御まうしあへいさゞはむかひのよ人を
そさらふせ久々せうさいし中務さう給ちじ給はまくる所
面とくぞ上て進ぬ久々ぶきれちのつきひめ身を有
御乃はだうりの御まへ御くるやう給よ見ん申すがく
しくせう主じ川出しけりかくふきだし秘ふ宮ゆくは
かく寺乃はわりしのさゆるまぐきやれ捌とよのこの文
の天ぎを御進はれおまぶとよひもまくまくかくこそ
んせのこぞはくし宮もぶどうくまうかゞうと山三井
寺ちたも出進ほど乃ちぐすれ我しやもはへ給ふ

かくさん乃せいとやくそく致しあくちはいろくおりたれハ。
やうやうぐうのわざやことがくゆら坊のうへしをかくて妹
むかしはあくをかくりんしおひらくる内のとうくらう
坊ちらのちもぶけかうのをはさぞまりんのはてう
母を殺め乃んさの人とそやしされかぶにてをまれおきて
うしまのかくさん乃せいとくはともぞ。里よは目ふなさかん
そしはそこんでも姉ようふかなるがかくさんともなこら
かんむとおのしも見てくさまとゆはてぶきまれ人もれ
まはく母とそれなく系のものしくよ見てらまゆく
が庵しはらんとやしきまとくるぶに引しともちごとさらへ
ぐとりに杉ばらのけあしぬ母くはそてゞしせよ一家二
年よ一家もくてきうくゑがかくさん乃せいはうしまく人

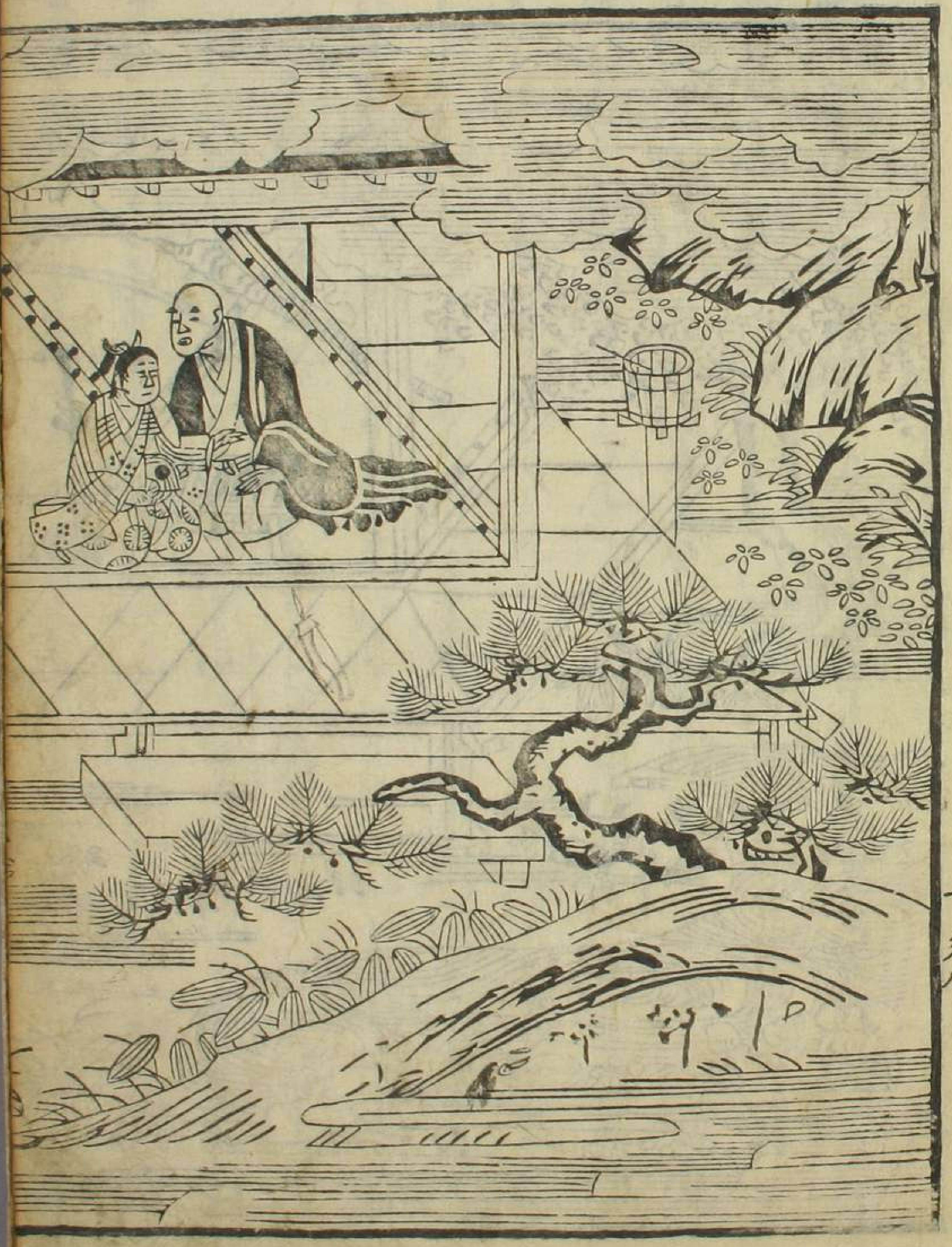


のいろある天まのをとめるやおつまたんた十あまり秋の法
まをがくさんのんさいくのかふたをまたうきのゆへを
かるきさらうさぶりのむかりんをまとめまりくぞあるなる
あやうさんだうのまり
雲気むろ町ふうちまたらうぶりのまたるぶさらかりし
かりたるが気をねそろしきさのあるそんなりさぬのうと
の夜の流めのとみうちまぐの流れまのさまてよがるかりたべいち
のらんの時に十一さいよ此たる流れそで乃あやうど覚
とまるべきのやのしたまでも覚やくあてしきまわち
たるが膚うくよかくしまきそ十九まくねとと不能し
てかまぐ乃こゑれまのさちうぞや巻つやまさちの廿一のと
しやひたるをかうぐんふ子とめのしてされまのひぬべいち

まろしとをも新造がひとく後をあそんをたえてそてぺきう
ものなん紙をけむとく星霜をくるのを一時さまよりか里ふ
かうが母さまうしきの子れがも出家しくちよかくとあむきや
うあくぞうの流かてひとよまうりひれやのごせとまと
ふうひけるでやとあひたまとちんせいのてへぞあさむぎや
あたうちくぜんの面見さるの乃こわりぞきさいよのおんらド
といふ所よがくさんしてわりたるが不つ里乃うのまをねのひ
出しく我ぶよるまとく空でうりの流づうり母ぞとうひきなね
あそめくらうたうかうりめうりぞとあやうさん協しぞや名随
み雲気のひびつまぞそやたるをはとめ乃ひまよみ云年家
乃ちんあやうしきうそ見つくめきぬしくぞねのひうるぺんの
うれだ平家乃あ段大路乃くまんふわがうまも念ますくも

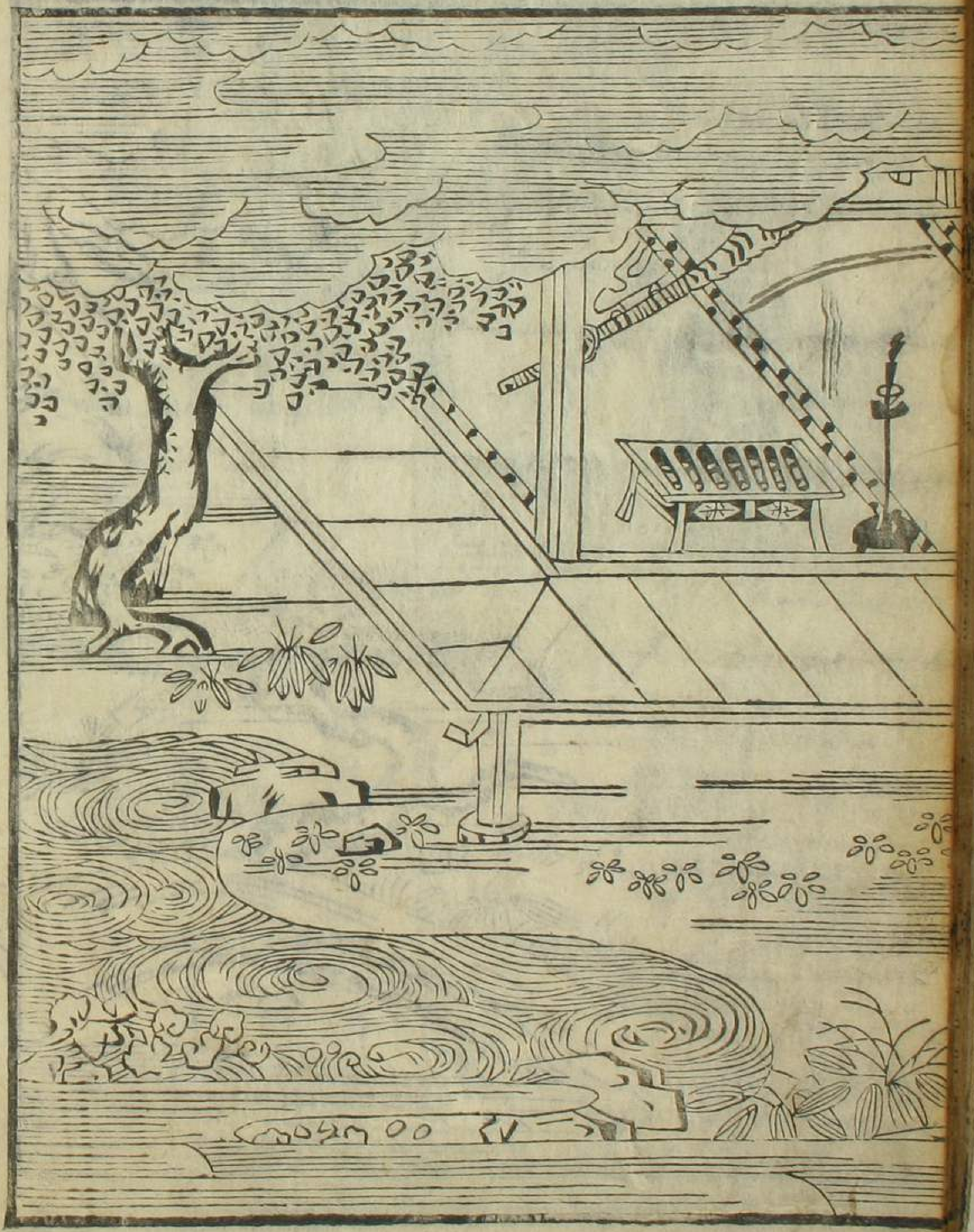
しんらきいしやうふるまひおほくわれぶんどもかりがんへい
ぢうのせんによりしかばさまで仰しおよばずきこえれなき
わひとふしうれきしあらはれてくいまのそのかたはらにはし
出しゆゑにくまかりもしきまりがたくもかりおはりんさう
いんじのわかれまかりばぬかへりぞはへりいづけて入道とよ清
そもそもくるかんでしめすこととなきやうぞおひゆらつ
とあるひまくつはゆびをわくあくのいらんどもぞうもん
たるのきよもりはしんぐうのすてぬりをもらつかたちの国よハ
いとにのおたよりしかうら播津の国にまで人ゆきける。
じよのには源三位よりまさのへやりのまことあんぢんおろそ
のせよをさく朱の源らひぐよりぱおかたの国よハかなぜのくハ
んじやよるまの国みハあかしせんしじいばいのせにそ兵衛の

ありけるまゝにびくち乃中よりおもてのうちへせんじやう
よし乃ぶさんけの御ゆるしもきよりしよ上野の国にて
そのあとは主ぶをやぶりてとをくながらへすみよハ
を頼ちかきはよハくしてよりかりの家乃もと系の水みち
しかのよとておちまつろのそ家うまくちりはつくてき
いく孝なしまさんのこもちしく伊豆の国へ下りつまゐ
ほのもけ平家のあわれよおほち国をもよはりくさおしや
さるやとおひたれどわふしそ北条のほうひもり
乃時はふくまれらてもちへくうち入とてそ
のからさむハきよりのえんにんもんなれどよ北条
まんひでつまいおりしらとゆたれあすぞねよりさいたまに
もざるがそくさうりくちよりかどのまくみそをされたるなひ



くまかくさんとさうきんむかんとおほしくまれ
なきよしうざりかはきき親王乃流れくみ人しけすかそう
しまりなるのわちまちたる平へまろくはかへよ以仏わてしゃきを
なるしろつめされたれば、やいまはくなりめしまいらぬまるる
せいわ天皇十代乃流を忽ち後の世のなんの夜乃まもりくわうぐうしゃ八
かりの夜乃流めのとくみよかげ乃れば乃源氏乃子孫わくは
一門乃源氏あまくよおもあめ先ておもきまうせれしとい紅
かりめされたればやとまたれでも平家のせいぶんれてさ
うまあまでもかつかりそいなるんとおきなうざまられ。
源氏重代乃ものぞそうしきゃきつ方もそしろうあちね純
うめくさなうのさまれあるしけたしくだざてもと一ふすて八
からふまのじとうろくあくとそむやうきん源とば此ばされなり。

うしろかげを見おくりてのうす
ちやうもんよりかひなく御ありがたくもんのうすわくらふ
くるしみをそくばくまぬかれんのうすそのまゝぞたがひにめし
たぐひなかりしをたちまち給すくぶちやまさがせくさうかおすぞ。
まことやまことのありし人とくさいちうき給ものちゝわひ
おもひもよらぬ事かなしむひとりそく候のたくよそうしよ
扨がまへ子のふかりおむかしさいかめのわかあきらめ
かんなる上の御事ぞく所へいかんしもとやうふかくて世
御ひかかなる事わか上人もさくるひかりまいりしもまと
そもよそぬしをさかるが御事のはてのおもと致
ゑんとぞわくさふまて世のなかを見るよるまでぞこれ
のさう着んも事のすがたくもせをし世御ひくるよしわ

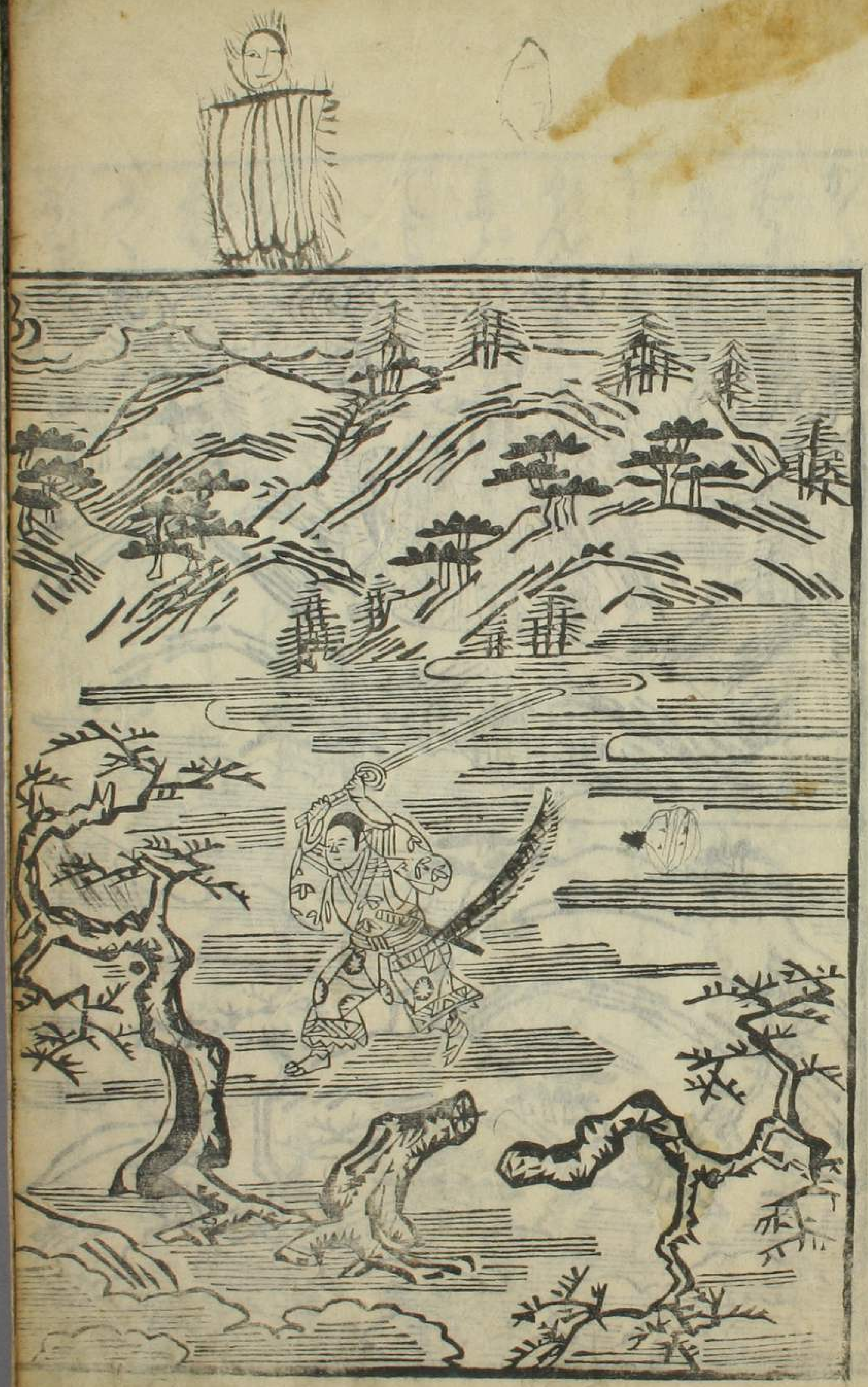


らしやう今ハ天狗乃すミかとなりて夕日わしよかゝる堂を
だいこの木きおほきさけぶされど来らさる人もなきやま
をすさるさんちうまうち入ても知る人もぶされどうしわかず家を
乃そとうしを門の口へ入りかうがくもんたしかすいよまで
参りてうるを日比一筋すくまるうくも彼来らせんとやつ
あたしもよ志かせむして庵の子まもりの内ゆあうま来て
せうしたきまいもう有りしよおもむて中ちらの太刀を
来らもすで一人まぶの御弟子母来らの御弟ん他ゆさ
せ給ひうつかは母とあすれい乃御弟ハ八十ん大がくさ川をまかん
とあうせてぐんじを申されをかへ志わくぐん内とおや
うあしわらぶ玉乃れかうでんけくつもふ町乃志をまうを
さきんしなんとこせいしくぶめんちらひけさるれ

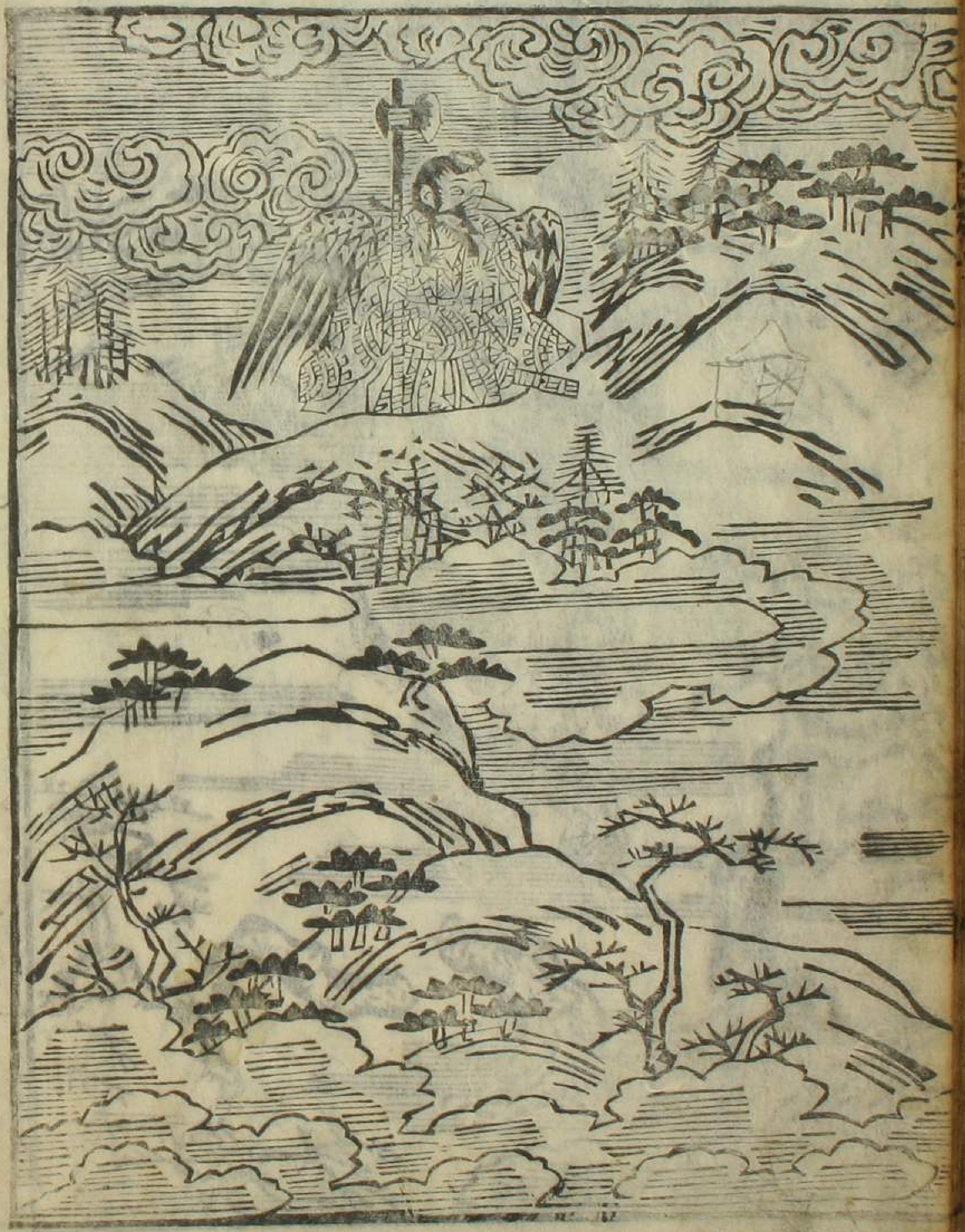
ゆかりくさ杉かつらの木くさ木なれば平家乃一族いと名
ばかり大木二本そうに紙一かんをかき来ようとおもひげ
きそふをねさてくさんしもぶらぬで志給ぬをぶら
ちやうのむ乃庭う所の子のをとうひで本のえごをまゐき
一枝きをもしあま守らにかくびとりけきいときにしまるを
つるぐくびやうくうけしまゐらずかくてわらはしさりまされ
なる所らてこくへりをぬひ来乃川さてかしかの道をまあら
むいはけこともかうしの内ひ志のやくゆき母らかびさ海
子くるもよそわら乃とかきひくめをもれさぞおもる秋
ゆれてを志てひろかくまさくむろ乃さを見出ひ出
乃んまゐらせ御うみつるまのひ給ふるぞいそぎくう海まか
庵もゆくとて光陽に山よりゆまゐらばわがやうと大事に

れどうつゝまでうぢぢやうのおもやうらふしぎでこゝまで
てうしわうのつれぐしそうまでなまでとぞやすされるがまでう
ちゞうけうすぢやうのひくれさ於ける人をも歴ありこ
そよまでぽようがん吞まあらへくおなはまでだおしの
おもくひやうえしゆそれをもたれ御年のあぢの法
うやま多くさ世結へとやすぐまでだしぐぞれもそれなにとを
ゐさゝそ於ひいへとも。たうまはん申そう母なら
て流まてまでひへでぽけぐあ流おれてあ志かるべからず。
年おそれくきのまでとの緒ひきれだぞうしけふ於まれ
やまゝわまでよあまでそそんとさうさのそどはなれども
さのさぞくまれの法の前にてあぶらけくれのしかれど。
きうあくあまつくうるべしやまもありんざらまでまでら

一ノ又十



かく西ちう坊の律師申されけるは、さては旅人かよふとおもひ
ふすましきりうかゝしみゐるが、かくそんもほんにいうだとはへぞ
まゐりしがいさゝかくおくくはへ八はんにしづかにはかくそんは
うしと申されければ、さてこそ出て堂場をさまたげりてさいくさふられ
さんざうハとくかくやち坊へ入せられのちへかへりしばいんとやくて
まつくしやなまうと夜もぞやつ帰けれち坊よハいきうすてまはう
でもおとずまりぬほどよ夜ひふけ来しそむかしのあそびぞ給ひ
吉光がおとう物くるまのうち
かくて年もくれければ姫年十六にぞ成のやうのうちへ
前よりまへくるしさよふしておりしが、ふしぎに三条の大
ゆくちんさうぢやうを吉光のいもうとぞや申くらふ毎年奥
州より下りけるおふと人かりけるが、くるまを傍しはりけり



るぞれも血のゆゑにてそ弥んぢやしてやうちなるなば山おさ
なひ人を見んはりくわうさいの仏ちごやいり給ふ人の恩
逆徒らん給ふべき人のゆくゆく得されど大気えわきて給ふ
まべきなど候ふと見えけりには陣一人おはしまさばそおもしけり。
は山よりみのゆかりの藤乃恩ぶらけたちもうち掲げのこと御らん
ひぐ平もくらひと申し山ちるふき血のゆかりの藤乃恩送おん
ちまりそあるまてぞがうさいの大二経とうよりはせけむ六十六ヶ
国をちぐべんとぞ申すの給ふなる源氏乃代を恩送と一人
下しまいらせ、いで井乃源氏にも京都そて二人の子供を
南面のかみやうあつさたてぞひぐ平いきてらん頼もしき
妙なる後くぐんじと恩となりしはさきなりぞへこぬけしのあ
くみてわらだやとの給ひはずのそちひはりぞどりけり。

らせ給ふ供してひぐひらのぐんぜいは入ぞひさて抱へくよく付
ぢやとおひはおほせしこまひてやくなるぞ恩を好よいかるまろ
人の恩ぶらみくだしまいやらん。先八家のゆかりすくはる合
とおもうすひく毎年抑うする下ぶちかはくはがたくなった
ろうしめしそるらんやは入はと申されたがみはりのえなり
と給うまてく好るすこし給ちびお道こさん四文ゆるこぶとは
さん春氏との上ちわるか。奥州乃藤原しやたんされはとつぶや
とおもくかちのくれとら六ひかでのひろさ恩ぞとひ給
へたでぞ大ると乃恩うそいひくちの国と見らみくみてのさるひぐさ
ん手とのせきとゆくでてもと奥州とのさらひそなかんせさ
と申しこ手又十宝くんと申されだもこ手小源平のらん
当家らんは開みふるべきちいの頼まへきとひまへ時ぶの案

内みしら子すまた吉紀くてかくぞさやけかりむかしあふ坂の大将
家させたまひのたまふぞや。まさつかまつり一人のちわうちやく
くらや源の清せんざくうの二男なるのらうのこれはまさう。
いかくさうとまへ一ちう志賀をまうまくく六人のとまふ子ありさう
ひのくまんじやうやうそくにてさらまかのこしかすこそてくさ
ところ肘ものまのくぶうこの井ゆくは紙をくりるすでもろく
せんあらはるまてく兄弟子ときの人さかう人すとあらはさ
子くろうがふけ八九尺丈すむじ尾子まうがくは八丈丈すいづま
も八尺はとろみ都し中すえさいのくまんじやうを一丈三
すけるおべのむんのこの世中のかくなせんしめんぜんするを
それくが毎年上洛しくざさつえんとやまあてはるおべのご
んのこみ光の役をせんじまいらせむこくめんぜんれるう

内をかへく本ちの西のかたまちを都をとく上洛仕るべきよし
ゆきまりはされどかくこらるゝべきそて下さるべきよしをく
きやうせんざうくらまへ天命をまもくふしそ後へ源平の大
おほくでしきはいそうせきを都へとまるゝ都まで勝ちるを
よしちくせんを承るとそ十一万ぎの軍兵を引しく。
あべをはいそうのくあふきらくふへ下りと都を出るごの西
の経人子まかりし大勢たまふよせんちんをさせくだき清さる乃
国いそうさの本をはきざぐさう先をゆずくらや源の
城をさ引くおつり家のそう山紙し源よわてくれそるとみこ
ゆりよこをでとそそゆきかくの事をも世をむかひく源氏をま
清大勢大ま丈大将とし文百よ旁白源のせきをおそうし
てゆきがく乃原まを世きはさぐさうしを世ひとき白の軍

に打まけくわさかのやまへ引しりぞくがその翌わかし
あの中山にこそ有けれ。源氏がたよりのさとをもうちはのりさ
ちやうてきほろびんとせしに七年にてひとりもひらかざりし
されば源氏の十一万ぎをひきいてかけおりしとや山のくん勢
より東へ上りてくだりける小まち殿ふしたるもつぱら北より
と申されけるまではいまだ代をしろしめさずさせば
そうつせよおかされまくせんとて下されけるは六条がわら
河乃岩西へ掘り十三まで首ばかりをかけられせける。
されば源氏代々はいふまでもなくとかくれ羽ぞこの年のさ
くの日気千年の時に生れけるとぞ祖代だくてぞ右とやはり
と申されけるむくさんの気によりてせんの大将さもとる事いかにとぞ。
寛治せさつもてもろともく後藤内の申すとおもいて武士ぞくへんつらまく

八幡殿御子寛治さかせて八幡太郎義家とかうして附随つまよ
うなりけるはれびとくずれさんといひもとちらちく沼の十
二柵くだして寛治五年のうち奥羽へうち下りおわしつ沼の城を
せめられけるもさんぐおれまするかとせんとくざ
ちやうとそれで此里と申しけるに八年号がわりけれどもかり
平元年にわたくしあられ同年霜月廿一日あけりしあの城をおひ
落されてくずれけるまでいさむ関をせめおとしくずりこの
かりにありし源氏はたひくせめたりしかおりくの中山とうち
おそくぜんがくかなざはの城に引こもりぞれかく一両年を
とくり年ひきはまへ共がぬくしのおんなれぐまさごつくの
平右衛門つさ大将右衛門光経まてが家とももそてせめの
家衡よりかなざはの城をも落されてぬけさ山にかくれつゝ

江戸乃城よりあそびの河ぎりきまりてかねてせめてかへ
い三年六月廿一日よきひにちよりし大守の紙をひらか
しそのきぬをきさせていくつくの前へすゝみむかうの所のむね
をうちかゝり人をまつかるいの冠衣服着内にきどらぬして
殿のくまうまでねがひしあれ能よきせよひうちのぎんさんよへ
て東代のぞくの名紙わらずまのうへ附与判へ以供中にし三代
うのお和よ十一代の古家てさんくいのあつりめん御家のさよへ
らしたきの玉乃そいでよきあつきまでくいろかはりたる乃ある
よろこびたれだもつのきよひくとやしてしおあるをまでにをのぎ先
にし十字形のちえ又十万ござひぶくひくがあるうのちらうぞう
十八万ぎんうらくいれてそ源平のらんいでてきてらうきらへば。
代々くらうじん先ならぬべき。ちんすそしたへてとやしまう

一 きやかむまう殿くら出馬の事

さやかむまう殿ふを先ようのくがみく定しよきそうしそうぶ
ふぶぶよんおるきのらさんさまあるれりしうぶやさうおくるの
ゆのまゝそうしうけ八万ぎのせいを十万ぎとぞ号して中すよおぐめぐ八
万ぎ紙でそのしくぐんどうふうら東八ヶ国をぐんじゅ
ゑざうしるゝ中なりまた下野殿の国をうきあまとをえず先そうし
で十二万余騎とぞよかし卅万ぎに始まりく十万ぎ紙てめぶ
の中長東作殿よせもま十万ぎをぞ東万殿よひろそ
わが方のまちごの中あちあえぶうりまさりしるすゝおく
山のせいをそよかしく越中のたがまちせんのぐんひ
ならせすびくろく十万余よ敵でわぐちの中山をそ付ゆ
で母しわりてまふろうちて大津乃ろうふ特くぐんどうの

其万三線もちろんくおかさきの関とおあそく和よせの
よろず千万三線でも天下乃国〻に弘らせてがんじきを
おさんの一とやさんは平家物語にもちんぢやう志く
ひろくしらべくきずみ線で琵琶乃よふに定めうたせて和
まさうきんの千万まさぶくくたいの弦くうるべ三さみせ
んとかけてもお千六乃さみせんよハかきうつくぞ好みたる
はおとこめいをしてせなやとわかりめしちろくあしてなれ
くうちぶんぢなさてでもしきらぞ人よひろまるべからず
こまでしてさ座の上にもどりみなくわまでひろくひろが
りへるひるくしはくでやいはのはやりとおそくされ
んぢろうし線しまでそれでも三線までかけら出
しのさきを地よりかでやまくて流行しそでひろく平曲家

まやしきれいのはかしんを三もおちて下下つまで国へ流の形はやき乃
升住さんぢろわや中くまでで出ふれのおちのまくんもん何と
弥くさらずは登て下ら出やとわかりめしかれば流の流
下つまでさんぢろそれの形へも御吉日やくほつるの
あとく乃それ付さんぢろとやくれだぶさへがわるく江戸
ぜんぢの流まへまくまるんを流しの形にまで八吉衣さ哦
まちにきて下りきてくさのちぶや文庫門平より
の場よりへうちくるのうちだちよおきもちや七さい乃夫の
誌もち弁六乃今よいてうまくおしきれてくうちんのさ
うし線ちくいやよるまよ八三丸の加しとりてきさ日本鈴家で
まへしなからくそ乃御道の流れおちろう三今ちうとお志なれ
新だしるきまよ出てやく形へ我おもしこのむせびのひろ。

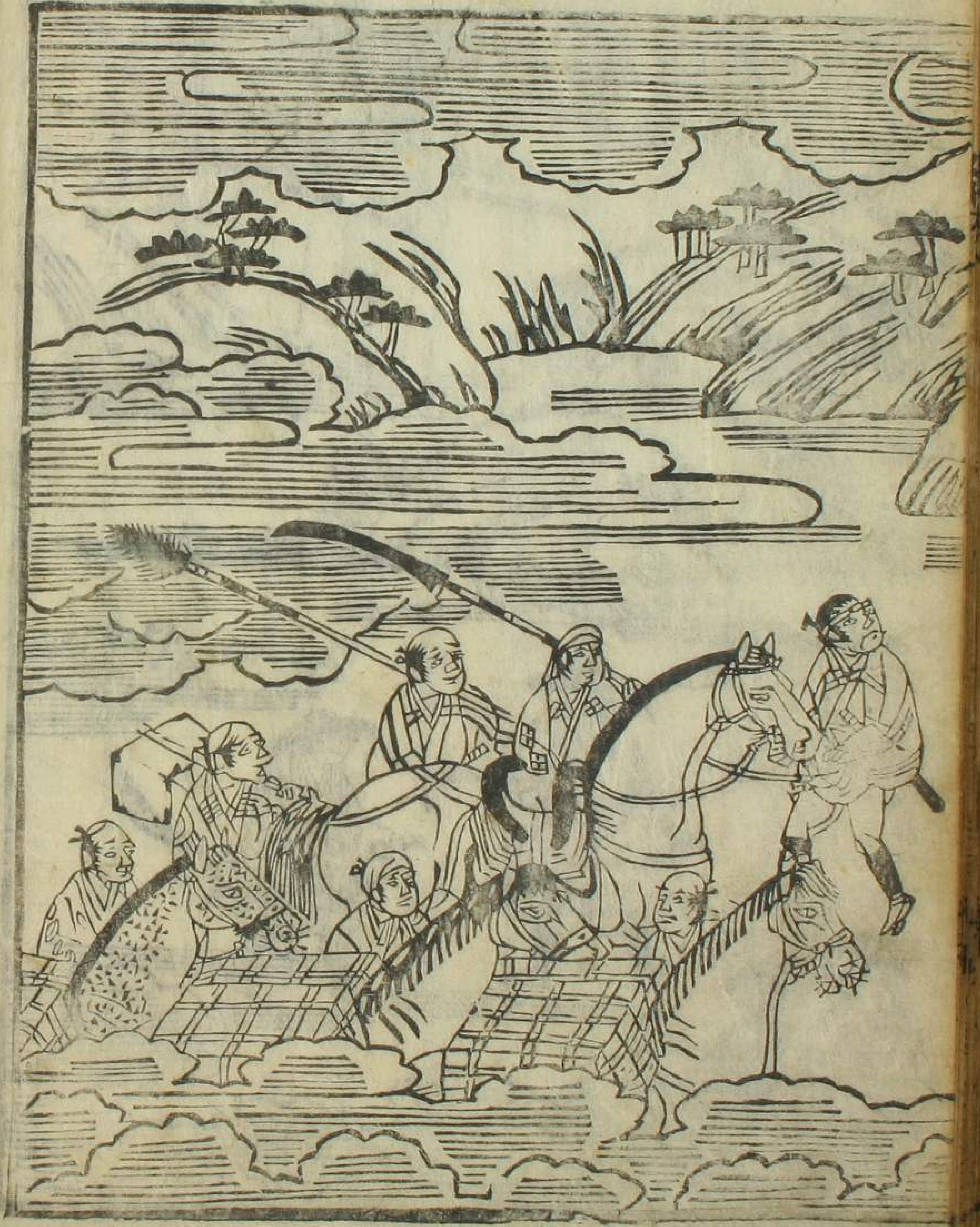
さまでもよろしくてちかすかべきにわうきれぜせうわん二
年二月二日乃わけがのよく油をぞ出銀かさ小袖一
かさ丸ようわやとさうまねだかまへわさび乃ゝびくせよ上
母めし絹さ大坂よりかゝあら地のひくて生めしたさきへとい
娘ちうや絵さごあめしくぼんぢ乃母しきにくばうさやつ
はくまうまがりぎれきう丸絹ちの太刀きひくうしとぎ
あやうよま由かるく絹まくがくまろくゆひわざ家にばそ
ぎゆくうべきへでゝおすまちのつゞがあますぬ人のとわ
ばまえて太絹らんすまびよさう地先よわりもしそと思ひ
出くおわとまとつひ緒へうしと太これ々まゝでぜんちくの
ようでゝすとうきめずすゞ時だうまとふさてく緒絹さん
わくのうかんどゝく家くく母を出緒ひとを根八字条

乃あやうきん坊乃家へ出緒くだおうしあさへ下家わし絹ら
まゝられだぜんわくれともやゐきんと出立るまじや家日う
夜ののまひろうさ波へんまで絹よ好ぐやうまそ年家のあらゆ
ちさ母を見ゝく太し世よとて京わすぞとくぶめられろうぞて
あやかまう夜わえさはおゞく出のわ光やうきん坊にそれ
おぐとろうなりのと千ぜんじの店おわく美人を絹緒へハ。
まれいますぐ絹つうよ京絹出くわたて江戸出来家。紅
くのすらうしと二十うひさまよ行みせてさ絹ゆそげうと
ちと家絹だんじなうあみぞ出ちる徳おひくひさう絹
太ゝうもあまはくしのひくゝまれ林毛のむすぞ絹太ひく
く緒くら客なりむまゞよばけのぶゞうきん乃くろうせきてぞ
のまとちうるうちづとの世なりんとゝくはくさぎるうまうん

丁又七

いかさまちのこゝろばせこそくわんおんのちかひにておはしまし
みしくぞおもふところにや、かゝる夜いまだくきくせざりしと
のたまへば、あるひとはいさとよ、さらばいそぎたまへ、くせのせなり。
かくてかれんとほしひとたびはかくぞなげきたまふ
かれがたきてのちひきるをみぢのしまのえうきたち
をせきかくぎりかんめうげぢひそけんがあらけうまし
わしまるもくだらんとおもひゆるすがくゝ夜よりこといひ
わかれけめでしのみまことはいひてありきさるゝめて
東海道をまたぞ下らんぞとくだりきたら山やまをこえ
みなゝぞのかけて夜までいけんぞうおちつきて
ひとしきん衆まついちぢんのえたのまゐんかやこゝろして
乃ゐんだのせわしかる山をもちえんもかくれなかりけれ。

ぢんどうとのふうきんじゆんざしのまへにすゝむところばの
まゑともりくさもりくのむまにのりてのぼるべしとて
河乃せいれいざんにもちかえだひく平うちぎやうのかほれ
だ兵のふるやらん風乃つかれんもまつまじきぞとの
船へだ者兄弟とをそてうち家ねそろし実ことわりぶけの
ありつら船んにる一ひときとゞにものゝふのびしくぢうぢ
おゝらうどうりの一こ紙ぢんにもくし船ちぐぐぶんざいの宮
実のちきやうもろ出乃る所ねく下らんとの船ふそお
そうし達とぞさひくろうされども命にまかせひこまをと
ちやめく下馬強よせ引ぎうそえおえて宮乃こゝやぐら
ところもざあやさう乃せきをうちあえそ大はのち兵を
もと紙つとうつぱせてのしそし打ちらまかゝるの事やくに



はきのうちやうみなぐるし坊の者どもかくれなき女
ばうあやめし初しめくしよろこびてすゝめ送

義経記巻之一終